

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ローマ滞在日記⑧

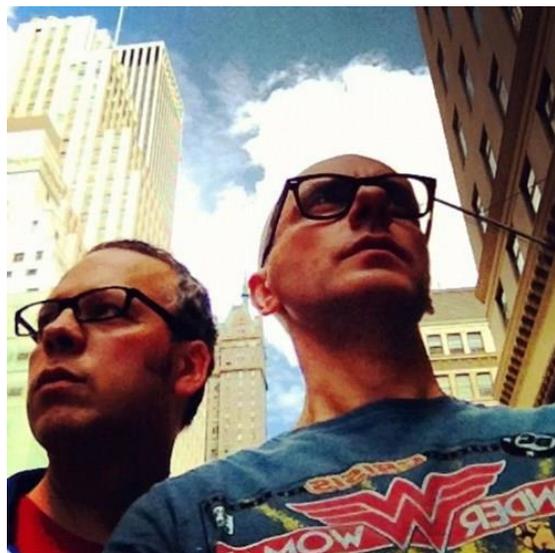
フィルメーナ！

二宮 大輔

1997年にノーベル文学賞を獲得した劇作家のダリオ・フォーが先日亡くなった。享年九十歳。1950年代からミラノを中心に活動し、ユーモアと風刺で現代社会を痛烈に批判したイタリアを代表する演劇人だ。その彼の訃報は、私にとってひとしお感慨深いものだった。というのも、つい最近、仕事でイタリア演劇に関わる機会にめぐまれたばかりだったからだ。それはイタリアの戯曲に日本語訳をつけるという、願ってもない仕事だったのだが、これを依頼してくれたのは東京の劇団・文学座に所属する演出家の高橋正徳さん。文化庁の新進芸術家海外研修制度を利用して一年間ローマにイタリアの演劇を学びに来ており、同時期に留学中だった私と、共通の友人を介して知り合った。そして今回、海外研修の成果発表ということで、イタリアの戯曲が選ばれることになったらしい。「新進芸術家」の発表の場ということで、新進でも芸術家でもないが、比較的若い私を、翻訳者に指名してくれたのだった。なんともありがたい話である。

日本でも上演される機会の多いダリオ・フォーやルイジ・ピランデッロではなく、いまだ知られていない戯曲を日本で初演しようと目論む高橋さん。現代イタリアの演劇界で何かめぼしい芝居はないかというところから話が始まった。まず名前が挙がったのがリッチ／フォルテ。ローマの名門演劇学校シルヴィオ・ダミーコ出身の二人組で、国際的評価も高い気鋭の演出家ユニットだ。高橋さ

んは 2012年に国際演劇フェスティバル Romaeuropa で彼らの衝撃的なパフォーマンスを目撃して以来、注目していたらしい。パフォーマンスというのは、裸に金粉を塗りたくりながら踊るといった、前衛舞踊に似た類のものなのだが、劇中のセリフも詩の断片を散りばめたような、一見理解しがたい言葉の連なりを独白していくというスタイルで、かなり斬新だ。彼らの戯曲の一つを冒頭部分だけ訳してみたが、あえなく却下となった。とてもではないが前衛的すぎるし、テキストだけで彼らの作品を判断するのはむずかしい。

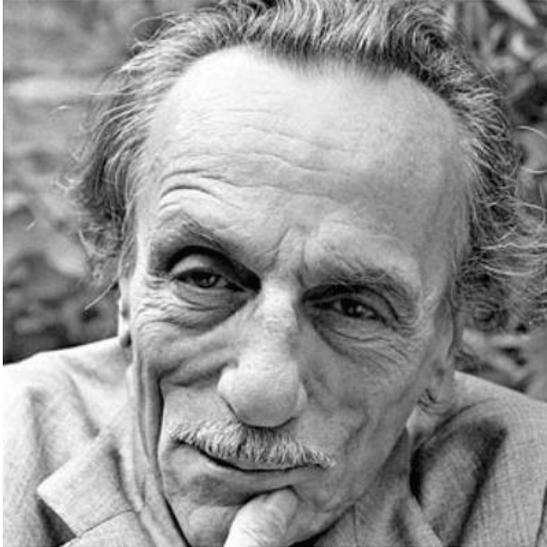


【リッチ／フォルテ】

出典：<http://www.ornotmagazine.it/project/la-nudita-interiore>

-ricci-forte/

その他に名前の挙がったのはエンマ・ダンテ。パレルモ出身の演出家で、女優アルバ・ロルヴァケルが師事していたことでも知られている。シチリアを主題にした劇団「南の西海岸」(Sud Costa Occidentale)を主宰している。また、アスカーニオ・チェレスティーニも。独特な語り口のローマ弁が小気味よいマルチプレイヤーだ。映画監督や俳優もなし、詩も書く。両者ともに、演劇関係者に贈られる最高の賞であるウブ賞を獲得している強者だ。



【エドゥアルド・デ・フィリッポ】

出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Eduardo_De_Filippo

さて、現代イタリアにも魅力的な演劇人が多数いることが一通り確認できたところで、高橋さんが選んだのは、エドゥアルド・デ・フィリッポの戯曲『フィルメーナ・マルトゥラーノ』(Filumena Marturano)だった。十九世紀、ナポリで劇団を主宰していたエドゥアルド・スカルペッタを父に持つ、イタリア演劇界の最重要人物。現代ものをいろいろ吟味した後でのまさかの急展開。最も典型的なイタリアの戯曲の一つが選出されたわけだ。確かに、デ・フィリッポは知名度が高いわりに、ダリオ・フォーやピランデッロといった他の大御所と比べると、日本であまり上演されていない。それもそのはず、デ・フィリッポのほぼすべての作品は、舞台がナポリで、ナポリ方言で演じられる。地域性が強すぎるゆえに、予備知識なしで日本人が観劇した場合、その本質的な良さがあまりにもわかりにくくなってしまふ。そんな理由から日本での

上演が敬遠されるくらいがあったのだが、今回は高橋さんと日本劇団協議会の英断により、すんなりと上演が決定したのだった。

そのようなわけで私が翻訳作業を開始したのが昨年十二月。『フィルメーナ・マルトゥラーノ』は1946年に初公演が行われた三幕の喜劇。主人公の元娼婦フィルメーナが、長く連れ添った実業家ドメニコ・ソリアーノをしたたかに騙し、二人の結婚を成立させる。戦後すぐの貧しきナポリ人の生きざまを見せつけ、結婚、家族、愛を問いただすデ・フィリッポの傑作だ。『ああ結婚』(Matrimonio all'italiana)というタイトルで1964年に映画にもなっている。物語は主にフィルメーナとドメニコの激しい口ゲンカのやり取りで展開していくのだが、これがまた、よく喋ること喋ること。原本となる戯曲でも改行のないまま1ページ喋り続けたりする。そして叫ぶ。テンポのいいナポリ弁に乗せて啖呵を切りまくるフィルメーナ。この勢いをどう日本語に落とし込めばいいのだと頭を悩ませる私の参考資料となったのが、動画サイトに投稿されている2010年国営放送RAIのテレビドラマ版『フィルメーナ・マルトゥラーノ』だった。主演は女優リアンジェラ・メラートとナポリ人歌手のマッシモ・ラニエーリ。注目すべきはセリフが原作に忠実なまま、イタリア中で視聴されるテレビであることを念頭に置いて、すべて標準的なイタリア語で話されていること。テレビドラマ化を発案したラニエーリは語っている。「私たちは『フィルメーナ・マルトゥラーノ』をイタリア語に翻訳しました。二十世紀のもっとも神聖な怪物の一つを組み替えようとするのだから、とても困難な作業でした。しっかりと勇気をもって、可能な場所までナイフを差し込みました。受信料を払っているトレントやボルツァーノのご婦人にも、カニカッティのご婦人と同じように、全て理解してもらえるように。」

これが、方言を意識しすぎずに自分が邦訳する上で、大きな礎となった。実は数十年前に劇団民藝で同公演が行われた際、日本語になっているのだが、これがなんとすべて九州弁に翻訳されているという驚きの内容だった。先人たちの努力と勇気に感服しながらも、それぞれの土地の方言は容易に変換できないものだと思感させられた。そう、日本人にわかってもらうためには、日本語

に訳すしかない。デ・フィリップが表現したナポリは、響きではなく意味としての言葉と物語で日本の観客に伝えるしかないのだ。

こうして出来上がった下訳を高橋さんといっしょに練り直し、劇団協議会に最終的な提出をしたのが今年の二月。著作権管理者にお伺いを立て、公演の日取りが決まったのが四月ごろだった。舞台稽古の日程も決まり、まずは台本の読み合わせのために、東京に向かった。新宿にある元小学校を改造した芸能花伝舎の一室で、プロデューサー、スタッフ、俳優陣とそのマネージャー、演出家と翻訳家である私が一堂に会して読み合わせが行われた。主人公フィルメーナを演じるのは文学座の女優・山崎美貴さん、ドメニコは演劇集団 円の井上倫宏さん。プロの役者さんを前に、今、自分は演劇の世界に足を踏み入れているのだと感慨を噛みしめたのも束の間、翻訳の意味や言い回し、言葉のニュアンスについて、次々と質問の集中砲火を浴びせられ、読み合わせが終了した時には疲弊きっていた。その後、二回ほど稽古に立ち会ったのだが、自分の訳した作品がマイナーチェンジを繰り返しながら手元を離れていくのを感じながら、それが彼らの芝居になっていく様に圧倒された。公演初日の八月二日から二日間、客席から舞台を見せてもらい、二日目の公演後にはアフタートークということで、登壇してトークまでさせてもらった。役者さんたちは長いセリフに苦労もされているようではあったけれど、彼らの公演から確かにナポリ的な何かを感じ取ることができた。

今回の翻訳にあたって、言語以外で伝わるナポリらしさとは何かということを考えていたのだが、それは「天国であり地獄」というイメージだった。十九世紀のナポリの貧困を記述したマテイルデ・セラオ『ナポリの胃袋』(Il ventre di Napoli)、第二次大戦の敗戦直後に連合軍と行動を共にしたクルツィオ・マラパルテの『皮』(Pelle)、そして犯罪組織の実態を暴いたロベルト・サヴィアーノの『死都ゴモラ』(Gomorra)。どれもそれぞれに地獄のような惨状を示しているが、その地獄は常に煌びやかな天国と隣り合っているような気もする。それがナポリだ。その点は、苦しさの中で笑いが生まれるデ・フィリップの作品もしかり。私の抱い

ているそんなナポリ像を、八月の公演では再確認させてもらったように思う。

ちなみに、今回の記事の題名にした『フィルメーナ！』は、公演に際して私が『フィルメーナ・マルトゥラーノ』につけたいと考えていた邦題である。地獄の底から声を張り上げる主人公をイメージして温めていた題名なのだが、提案する前に「著作権上、タイトルは変えられない」とのお達しがあったのだ。ともあれ、高橋さんとはまたイタリアものを何か企画したいと話している。ちょうどそんな折にダリオ・フォーという巨星が墜ちてしまったのだが、場所や人を変えて演じ継がれるのが芝居の良さだと思う。彼の死を悼みつつ、イタリア演劇のさらなる発展を願っている。



【フィルメーナ・マルトゥラーノのポスター】

出典：<http://gekidankyo.or.jp/performance/2016/2016.03.html>

(京都ドーナツクラブ映画担当)

イタリア最高の峠 ステルヴィオ

谷口 和久

「山の峰は自然によって創られたものであるが、峠は人間によって創られたものである」

(登山史家 ウィリアム・A・B・クーリッジ)

古くはハンニバルのアルプス越えを筆頭に、肖像画でよく知られるナポレオンのグラン・サン・ベルナル越えなど、アルプスの峠を制することは、覇権をねらうヨーロッパの為政者たちにとって大きな課題であった。実際、ナポレオンはイタリアに攻め入るにあたって、ハンニバルのアルプス越えを大いに研究したという。彼の命により開通・整備されたのが、セント・バーナード峠で知られるグラン・サン・ベルナル峠やシンプロン峠である。

最後の神聖ローマ皇帝でありナポレオンの義理の父でもあったフランツ2世。彼は、アルプスを越えてオーストリアに攻め入ったナポレオンによって神聖ローマ帝国を消滅させられ、さらには娘まで奪われた(?)わけだが、そのナポレオンへの対抗心からか、フランツ2世は新たに自国の領土に編入されたミラノへとダイレクトに通じる峠道の建設を命じた。ロンバルディア州の最北端、スイス国境近くを通るその峠が、こんにちジロ・ディ・イタリア最高の舞台とされるステルヴィオ峠である。

ステルヴィオ峠は標高 2758m。ヨーロッパ・アルプスで自動車や自転車の通過できる峠としては、フランスのイズラン峠に次いで2番目に高く(※)、当然ながらイタリアでは最も高い峠である。峠へ至る道は3本。東はボルツァーノから、西はボルミオから、さらに北側のスイスからも道が開かれている。いずれも麓からの距離は約 20 キロ。標高差はボルミオ側で 1300m 超、ボルツァーノ側は 1800m を優に超える。

(※フランスのボネット峠が、峠としての標高は 2715m だが、道の途中で 2802m 地点を通過している)

工事は1822年に始まり、驚くべきことにわずか3年後の1825年に完成した。

工事を担当したのはソンドリオ県の技術官カルロ・ドネガーニ。彼はすでにいくつかの土木工事で実績があり、ステルヴィオの大役を任された。この難工事を見事やりとげたドネガーニは、フランツ2世のおぼえよろしく、数々の叙勲を受けることとなった。

ステルヴィオの開通した19世紀前半は、自動車はまだ実用化されてない時代。交通手段の主流であった馬車が通ることができるよう、斜度は基本的に10%までにおさえられた。一説には大砲を引っ張るためでもあったといわれる。雪深いこの地では、冬にはそり馬車で峠を越えていた。



【『ベルナル峠からアルプスを越えるボナパルト』】

出典: https://en.wikipedia.org/wiki/Napoleon_Crossing_the_Alps

ステルヴィオがはじめてジロの舞台となったのは1953年。この年、ファウスト・コッピがジロ・ディ・イタリア5勝目をなしとげ、アルフレード・ビンダの勝利数に並んだ。そして、これがコッピ最後のジロ優勝となる。

この年のジロで絶好調だったのは、スイス人レーサー ユーゴ・コブレであった。コブレは、すでに1950年のジロでバルタリをおさえて総合優勝を果たしていた。イタリア人以外では初めてのジロ総合優勝であった。

1953年のジロで、コブレは第8ステージで総合トップに立つと、ドロミテを越える第19ステージまでトップをキープしていた。最終ゴールのミラノまで、残りはわずか2ステージ。この時点で2位のコッピとのタイム差は約2分。山岳コースであれば逆転も可能なタイム差ではあったが、それまでのコブレの走りっぷりから、総合優勝はまず間違いないものと思われた。なにより当のコッピがすでにあきらめムードで、第19ステージゴールのボルツァーノでは「ジロは終わったよ。コブレの勝ちさ。『Il Giro è finito. Lo ha vinto Koblet.』」と、敗北宣言するほどであった。

そして迎えた第20ステージは、ボルツァーノからボルミオまで、ステルヴィオ峠を越える大舞台。最終日は慣例として凱旋パレードとなり、本気のレースは行われないので、実質このステージが最後の勝負どころとなる。

勝利をほぼ確信して美酒に酔いしれたのか、総合優勝を目前にして気持ちが高ぶっていたのか、コブレは前夜あまりよく寝られなかったようだ。腫れぼったい目を隠すためサングラスをしていたものの、いつもと違うコブレの様子にうすすら感づいたコッピのチームスタッフが「写真を撮らせて！」とかうまいことを言ってサングラスを外させ、その眠たげな目を確認した。そして、コッピに「今日はいけるぞ！」とささやいたのである。

メラーノからステルヴィオの登りにかかるころには、先頭は有力選手に絞られていた。コッピ、コブレ、それに老兵バルタリ、フランスの若手デフィリップら。

ここでデフィリップが飛び出した。彼は総合成績では数十分の差があるので、本来先行させても問題のない選手。しかしながら、コブレは寝不足のせいで判断力がにぶっていたのか、無理に追う必要のないデフィリップをムリヤリ追いかけた。のちにデフィリップが語るころでは、後ろから追ってきたコブレはかなり息が上がっていたという。

そんなコブレの様子を見てとって、今度はコッピがアタック。二人を追い抜き、そのままペースをたもってステルヴィオを駆け上がった。

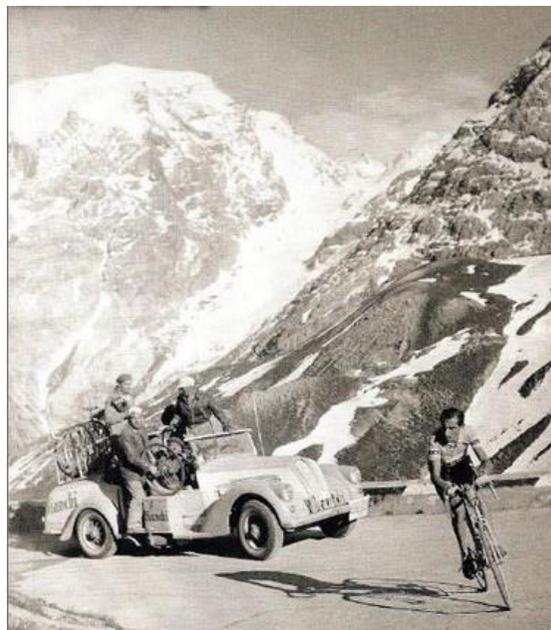
ゴールのボルミオでは、コブレに3分以上の差をつけてゴール。総合成績でもコブレを逆転した。

この日、コッピがステルヴィオを登る雄姿は、自転車レースのもっとも美しいアイコンとして、広く永く人々の目に触れることとなった。

このジロで5勝目をあげたコッピであったが、以降は成績も振るわず、また既婚女性とのスキャンダルにより社会的にも厳しい状況に置かれることとなった。余談だが、まだカトリックの価値観の厳しかった時代、不倫に対する世間の目は現代の比ではなかったであろう(現代の日本もある意味厳しいようですが)。

そして、7年後の1960年、アフリカで感染したマラリアによりわずか40才で命を落としたコッピ。晩年はつらく厳しいものであったかもしれないが、戦後、彼の活躍がイタリア人の心を勇気づけた、その功績はけっして色あせるものではなかった。

彼には最高のチャンピオン“Campionissimo”の称号が授けられ、その後ジロで通過するもっとも高い峠は“Cima Coppi”(コッピの峠)として、トップで通過した選手には特別にポイントが与えられることとなった。彼の最後の活躍の舞台となったステルヴィオ峠を通過する際は、もちろん、このイタリア最高の峠に“Cima Coppi”の名が冠せられることになる。



【ステルヴィオ峠を登るファウスト・コッピ】

出典: <http://www.pezcyclingnews.com/features/un-secolo-di-passioni-italy-and-the-giro-ditalia/>

この夏、ふもとのボルミオに滞在し、ステルヴィオをはじめ、ガヴィアやボルミオ2000など、ジロの舞台となった峠を堪能してきた。

ボルミオには、世界中から足に覚えのある自転車乗りがジロの名舞台めざして集まってくる。街中でもステルヴィオを駆け上がるコッピの件の写真をしばしば見かけるし、自転車乗り向けにガイドツアーやレンタサイクル(もちろんロードバイクの)などのサービスを充実させたホテルもそこかしこに見受けられる。

さて、街の中心部から大きなテルメの前を通って登りにさしかかると、いよいよステルヴィオへの登はん開始。コース上にはカーブの数と頂上までの残り距離が表示されているので、ペース配分の参考になる。

道は片側1車線で路肩も広く取られており、路面も比較的なめらかなので、自転車でも走りやすい。斜度も、先に書いたように馬車向けに10%までに抑えられているので、一定ペースで走れば完走はまず問題なし。1か所だけ14%となる部分があるが、ご丁寧に道の上に白墨で「14%」と大書きされていた。

大勢のサイクリストが登っているのだから、抜きつ抜かれつ、ときにはペースのあう者どうし、ひとときのチームメートになったかのように足なみそろえて走るのも、この世界的に有名な峠ならではの楽しみだ。

中間部では斜度がゆるむところもあるが、最後の頂上直下がまた厳しい登りとなるので、ゆるいからといってあまり飛ばしすぎるとコブレのようにツケを払うことになるだろう。

頂上は大勢のサイクリストや、サイクリスト以上に多くのバイク乗り、それに自動車で来ている通常の観光客も多く、ごった返していた。土産物屋やカフェもあり、ちょっとした観光名所だ。正直あまり落ち着けるような所ではない。実際、夏場でも標高2700mを超える峠のてっぺんは半そでジャージでとどまるにはつらいものがある。

せっかくなので、コッピの駆け上がったボルツァーノ側(東側)の斜面も登ってみた。とはいえ、それほどの足も残っていなかったのだから、頂上から5kmほど下って、登り返しただけだが。西側の明るく開けた雰囲気とは異なり、東側は氷河の山々に囲まれているせいか、あるいは旧オーストリア帝

国の残影のせいか、どこことなく重苦しい雰囲気であった。

写真ではつづら折りのインパクトが強く、かなり厳しい登りにみえるが、もちろんこちら側も10%に抑えられているので、見た目ほどのインパクトはない。木々に囲まれて一見おだやかな様相を呈しているモルティローロの方が、よっぽど厳しかった。

ステルヴィオで一番のごちそうは、ボルミオへのダウンヒルだ。明るく見晴らしの良い斜面を下っていくのは最高の気分であった。ここはコッピがコブレとの差をさらに広げようと、必死にペダルを回していた下り坂だ。コッピの残影を感じつつボルミオの街に戻った時には、充実感でいっぱいであった。



【ステルヴィオ峠のボルミオ側(西斜面)】

【参考資料】

Istituto dell' Enciclopedia Italiana, *Dizionario Enciclopedico Italiano*, 1970

Beppe Conti, *Ciclismo, Storie Segrete*, Armenia, 2003

『峠』(串田孫一編, 有紀書房, 1961)

『道の文化史』(H・シュライバー著, 関楠生訳, 岩波書店, 1962)

『ジロ・ディ・イタリア 峠と歴史』(安家達也著, 未知谷, 2009)

『ツール 伝説の峠』(安家達也著, 未知谷, 2005)

wikipedia 関連情報

(当館スタッフ)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>